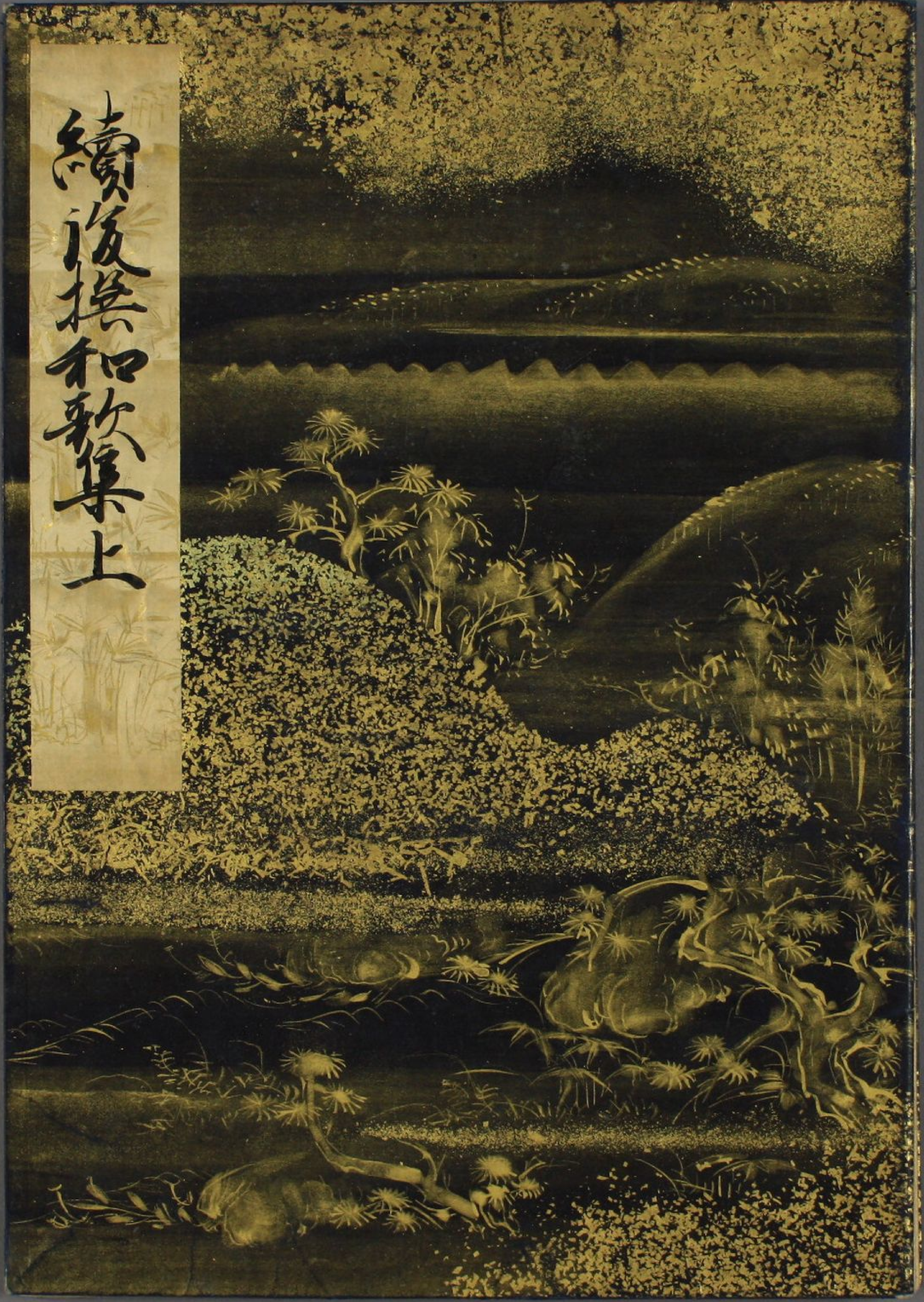
續後撰和歌集 上



九曜文庫

續後撰和歌集巻第一

春哥上

としのうちに春立ける日よみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

年のうちに春立ぬとや吉野山霞かゝれる峯のしら雪

永暦二年内裏後番哥合に霞といふことをよみ
侍ける

前中納言定房

うちさやかまま山の朝霞春はいつにも立にける哉

天暦御時麗景殿の女御の哥合に

壬生忠見

あさ緑春はいさねとやみよしのゝ山の霞のたにか見ゆらん

後法性寺入道前関白右大臣に侍ける時家
に百首哥よみ侍けるによみて侍りし
春のはしめのうた

後徳大寺左大臣

久方のあまのかく山照まさる日の光もしるくそ春めきにけり

はしめの春の心を

徳大寺右大臣

朝霞たちそふこれは春のよのみねのよし家に春はきにけり

正治二年後鳥羽院に百首哥たてまつり
ける時春のはしめのうた

後京極摂政前太政大臣

久堅の雲ゐに言の葉の道ハ今にかはらむ天のかく山

道助法親王の家にて五十首歌よみ侍りしに

神祇の心を

参議雅経

久かたの天の岩戸の昔よりあくまてハ千すむ影ハさしかゝり

影しらず

後鳥羽院御製

志るくさそ山の奥ハ千すめ世の昔にかけハ和やうらん

百首歌よませ給ける中に

入道前摂政太政大臣

春日猶霞ハふかくとも足引乃山のひかり霞あへし

位よたかましく出る時ハ人乃おのこともも影さ

さゝりて家清くさつりける次よ家を

太上天皇

敷島や庭まて志まゝの和家のもろまても言ハ守し

人々に十首の歌めされし時

神代よりかハらぬ言の志るしとて今すゝ浦まる天乃浮橋

前太政大臣

和歌ハそれともみえぬ跡なけり言さそ言の葉露なりけり

道助法親王家の五十首歌の中に神

祇

西園寺入道前太政大臣

立そむる霞の衣うすけれと春さてこゆる空のみゆれは

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

よみ人しらす

ゆきて春立ぬとしみれは若草乃淡の若菜よはつなり

承香殿乃女御の屏風に

紀貫之

あさ緑春立そらに鶯の初音をまたぬ人はあらしな

題しらす

よみ人しらす

冬籠て春立こし足引の山のふもと雪にも鶯はなく

鶯の羽風とほむなうすらみ霞の衣いまはきるらん

百首哥よませ給けるに鶯

土御門院御製

雪の中に春はありとも告なくに先しる物はうくひすの声

建保四年百首哥奉りける時春の哥中に

入道前摂政太政大臣

ちらさて梅風さむし石上ふるの山辺の春のあけほの

早春の霞ところんと

嘉陽門院越前

はかなの夜春風ふくとききて霞の袖にあは雪そふる

春の哥中に

西行法師

み吉野は何ゆゑ春と思ふらん雪消ぬにこそ吉野の山

延喜十四年女四宮の家の屏風に

貫之

山近は雪そまかふる梅の花春霞こめて立渡るらん

天徳四年内裏歌合

平兼盛

白雪のふる宿の梅か枝に来ゐる鶯そ春と鳴くなる

題しらす

伊勢

梅花色はふりにし白雪の香に匂ひてそ春は立ける

徳大寺左大臣

梅花色はそれともわかぬまで風に乱れて雪はふりつゝ

建仁元年五十首哥奉りける時

前中納言定家

心あてにわくともわかし梅の花ちりかふ里の春のあは雪

建保四年内裏百番歌合に

順徳院御製

春雪にまた消ぬを花と見えしころ袖に匂ひし春の梅か枝

参議雅経

みよしのゝ日数は雪に消ぬらん春の吉野の春の淡雪

残雪の心を

土御門院御製

埋木の春にあふことやなからん知られぬ谷の志たの蕨

堀河院の御時百首歌奉りける時

藤原基俊

春乃日のなからに照す垣ねには友待雪そ消えてます

久安六年崇徳院に百首歌奉りける時

菜をよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

霜かゝる雪も消ぬや見よしのゝみかきか原にわかなつみえん

おなし心を

土御門院御製

白妙の袖にあらひてふる雪のさえぬ野原に若菜をそ摘

建保四年百首の歌の中に

入道前摂政左大臣

霜しもる荻の焼原ふみ分てあらため春の若菜に摘らん

麗景殿乃女御の歌合に

兼盛

見わたせはひらの高ねに雪消てわかな摘へく野はなりにけり

大原野の社にまうて侍るに霞をとりて

よみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

春霞立をきしかは小塩山こすゑかゝれる松すゑなる

春歌乃中に

法性寺入道関白太政大臣

淺の生なかしの橋はなにそとも霞そ立渡りけれ

天暦御時屏風にしほの浦に霞立たる所を
よみ侍ける　大納言延光
すまのあまの志ほやく煙春くれハ空に霞めるやたつらん
かしらす
後鳥羽院御製
み浦をいなこの志ほや夕暮に霞にくもる沖津志ら波
後法性寺入道前関白太政大臣
雨とふ天さかる霞たなひく志つの浦のかへるなみの
土御門院御製
浦はみわたすあまのつり船霞にしつむ志ほやく煙そみゆ
建長二年詩歌を合せられし時江上春望
参議為氏
人とはゝみきとやいはん玉津嶋かすむ入江の春のあけほの
洞院摂政家百首歌に霞
正三位知家
見しまえの浦のあはゆふいつる春とはさそて霞さそふ
和歌所にて釋阿に九十賀給はせける時の
屏風に　後京極摂政前太政大臣
春霞志のに衣をおりかけていく日ほすらん天のかく山
春歌中に　源重之
春立て雉やなくらん志らさる山に霞にこもりつゝ鳴なり

題不知　　柿本人麿

春柳のうらにとまりなくまてにゆくともしらぬ鶯の声

中納言家持

あさみとり糸よりかけて春風のみたれぬさきにみん人もかな

藤原基俊

春風ハ吹みたりそまたきこそかつらにとそふ春柳の糸

道助法親王家の五十首哥に岸柳

西園寺入道前太政大臣

春風の立田ふさしの柳かけなひきもやらぬ波の下草

天暦御時梅に鶯なきたるをよませ給ひけると候

侍ける　　中務

鶯のまつ宿の梅花をとふへき人ハとかはあら華

花しらす　　中納言兼輔

宿ちかく白ハうゑせし梅も風のみちに君をみましや

紅梅をおりて中納言兼輔よりつかはしけり

参議玄上（言）

君かためおりつるやとれ梅ハも色ふかそいつるふかきに

春の夜中に　　権中納言定頼

梅花おりける袖のうつりかにあやなくむかし人そ恋しき

如覚法師

あてはさかりはさかん梅も昔にかへる色やのこると

従二位家隆

百敷の大宮ひとの袖のうへとかさねて身に聖人の梅かえ

建長元年二月はさくらの花さかりにけれはいまうちきみ家より野宴かりて志りし内裏になりふけるは梅むかしのふるさけによしきこゝめしてへしてもとめひつまさせ給けり

太上天皇

ゆきつもりて色の梅花ての後よめる宿の老木に

凝花舎の梅さかりなりけるをみてよみ侍る

前太政大臣

いろふかくにほふ庭の梅もいくよの春をまちひきぬらん

續後撰和歌集巻第二

春歌中

帰雁を　　　　　　菅贈太政大臣

雁金の秋なくことはことはりそかへる春さへなにかかなしき

恒徳公家の歌合に帰雁の心を

藤原惟成

行雲の旅へとかたもなく帰る春とともにゆくかりかね

百首歌奉りし時帰雁

入道二品親王道助

東路のとさ山のさ越にほのかなる雲にのそみて打はへ帰るかりかね

前太政大臣

たちかへるふる雁金とこそきゝつれはゆきき春の別路

権大納言基良

しのゝめにかすみの衣たちかさね小立まかれてやゆくかりかね

春歌の中に　　　　前内大臣家

つまこふるきゝすの別いつりわせて柳さくらに春雁

右近中将雅忠

なにはかたかすみに雁のかへるなるこゝろは春のかはらぬ

春雨を　　　　　　前関白左大臣

よはの月もかにふる春雨の晴ぬなかめに袖はぬれつゝ

野春雨といふことを

権中納言長方

日にそへて緑そまさる春雨はふるかすかのの色も若菜
芝しらす

前内大臣家

こゝ思乃秋の原は雪さえて草はみとりに春雨そふる

後鳥羽院御製

霞たちこのめ春雨ふるさとのよしのの花もいまやさくらん

同院摂政家百首歌に花

前大納言為家

わきも海つと山の桜咲ぬれは花にさなからかゝる白雲

千五百番歌合に　後京極摂政前太政大臣

山桜いまや咲らんけふふりの雨の春日にふかき宿
花の香の中に

参議為氏

かとあとこらかさしの桜咲よりも神なひ山よりたつ雲

土御門院御製

見渡せは松もまれになりにけり遠山桜さきにけらしも

正三位季経

ゆぬまはもとみし白雲に又まかひぬる山さくらかれ

後鳥羽院御時毎朝見花といふことをよみ
侍ける

三条内大臣

春霞花そとのみやわかれけん花咲峯にかゝるしら雲

後京極摂政家花五十首哥中に

前中納言定家

桜花咲にし日より吉野山空もひとつにかゝる白雲

入道前摂政家の哥合に雲間花

従三位範宗

山のはにかゝりてみゆる白雲のうちや花のさかりなるらん

藤原隆祐朝臣

桜花空にあまきる白雲のたなひきわたるかつらきの山

春の哥中に

大納言通方

はかひあれ花も衣はるをへて霞の袖にまよふ山風

十首哥合山花　太上天皇

見てもなほ猶とそしのはるゝ葛城のよそにみし山の花の盛

花さかりに西園寺にとゝまり給ふ人々まうて

きて哥よみ侍けるに　前太政大臣

おさまれる御代のしるしは山里に心のまゝに花もみるかな

久安百首哥奉りける時花哥

待賢門院堀河

むさゝねの梢は春もなかりけり桜をまたてふりかゝる白雲

上西門院兵衛

みよし山高みよりの白雲は晴ぬよにかゝるも花の盛(さかりなり)なれ

建保四年内裏百番歌合に

二条院讃岐

いまはの春にもならんなれ雲かゝる花に横雲たせく

匂ひしらす

前大納言公経

待人は昔やうらましみる宿の花ハなふとも盛なりけれ

和泉式部

花よりの心をつけてなかめつる春はおもふらむ君そ立あるき

なかるへき春を桜はしらまして散ぬふともなけかまし

壬生忠岑

おしむへき庭の桜ハちりはてんそ花よ出んとするかな

人丸

春霞立まふ(そ)山とみえつるハこのもとしけきの桜なりけり

菅贈太政大臣

けさ桜とにかへつゝ一枝ハ庭のかさしのもみそあけゝ

亭子院歌合に

藤原興風

見そらんむかしの色ハくらもさけつかはり小宿やらまし

凡河内躬恒

みなそこもおもてあやなくゆりなハ風やもと任せてん(まし)

堀百首奉りけるに　皇太后宮大夫俊成

君か代はよしのの山のさくらかりや雲に桜をあふくへきかな

和歌所にて釈阿に九十賀給はせける時屏
風に
前大納言忠良

よそにてはいたとも見し君やさそわかはそれまゝ白雲

百とせの春しそれ見ん花とのつ心と
前太政大臣

いまも又もとしられは家への人のなんかまさるらむ

翫花

ゆくてふくる老とあひあることよは行きさ山桜かな

寶治元年三月前太政大臣西園寺家に御

幸ありて花御覧せられける日よみ侍
ける
後土御門内大臣

思ひきや老木の桜もろともに二度春にあはんものとは

花の中に
正三位知家

春をへてちるをもしみしはとしことにわかれさめゆゑ左京なり
従三位行能

ちらは又のちもや出ん月かけをみるにまちすへて花桜かな
藤原資宗朝臣

月かけのさしもさしくれ行まかり山桜かなめてもすゝ春の心は

春日社にて花十首歌人々によみて侍

世移る時花を　　権僧正兼経

八重白ふなるかはよそにふりてしらぬ山ちかきも色なきと

哀や花をいふとを　　如願法師

よむ人をあはれくは哀や小倉まてしらぬ花のあはれ

ならし心を　　祝部成茂

世にあらし乃部に紅葉れと雪のあらは花の乃りやかぬ

前大納言経房家哥合り

おもふ所を　　資実

いまゝへのはなの色ふりて花のなるさきみ吉野山

建保五年四月庚申小春寒といふ心を

後久我太政大臣

天原さすまゝ吹よし春風に月のひかりも花にかすむ

五十首哥めしけるに次り

後鳥羽院御製

おもひ秋風はやの行まりに哥をも遠い桜よとりてよ春の月

春哥の中に　　前太政大臣

山桜花はへ白ふ雲かはりみすそのころありぬの月

朝花といふこゝろを　　入道前摂政

このねあさきけ乃風もん何かは花のおもふとをおもふぬらん

名前もとのふとを　　藤原隆祐朝臣

吉野山ひとつにみえし花の色のうつろふはてや峯の白雲

入道前摂政家哥合に雲間花

正三位成実

桜花うつろふ山の高ねよりたえまも雲にまかふ比哉

毎春見花といふことを

徳大寺左大臣

あそのこ花に心をとめしとおもへともさりとてもちらぬ春はなけれと

亭子院哥合に　延喜御製

春風のふかぬよにたにあらませは心のとかに花はみてまし

花為春友といふことを

基俊

散ぬともいそや桜の花心にそふ風はなにをとかすれ

後京極摂政太政大臣殿よりさくらをよみ侍るとて

ひとしほに梅かゝのちれ春や桜はつまそや

つかはしける

式子内親王

万代の春とこそまつ八重桜こゝやみよしのふかくにほはん

之し

後京極摂政前太政大臣

今日は桜かりこそへのかりせはちらましさくも春にいそかせ

建暦二年大内の花御覧せんとて御幸ありけるよに

てよみ給ひける　後鳥羽院御製

九重乃花ハ老木になりぬとも春ハ昔とにほふなりけり

久安百首奉りける時

皇太后宮大夫俊成

さきさかれぬとて桜花のとかなる春のこゝろに

かしはゝつら年

續後撰和歌集巻第三

春哥下

天暦七年三月内裏乃桜をおりて人々に
おほみきたまひけるついでによませ給ひける

天暦御製

宮人の心をよせて桜花おしみとめよかせにちらすな

題しらす

人麿

さけハかつ散る山の桜も心のとかにおもひける哉

よみ人しらす

匂ふより心ひかるゝ花ゆへにのとけき春の風もうらめし

随風惜花といふことをよみ侍ける
権中納言定頼

吹風といとひもそしむ春のころ花乃ちるへくとふハ数まり

百首歌めしける時　崇徳院御製

とおもハゝ折てそちらめ桜花をしまぬ人もかなしと云

花歌の中に　源師光

よし人の宿まておくれ桜かれたちまちハ歌の数まとはせける

洞院摂政家の百首歌の中に花
皇太后宮大夫俊成女

はるハちる花のうき世とおもふにも桜とあまれ山桜かれ

題しらす　西園寺入道前太政大臣

うつろきや花咲こそ春風はよそにみえもみぬ人の心霞

道助法親王家五十首歌に庭花
前中納言定家

訪ねえてとふ人まれの庭の昔花をもまたすらにたえし

庭落花と云心を　有京教定卿下

うつまぬ梢そ冬ふかりけりゆきさそふ庭の花のちる雪

花歌の中に　藤原信実朝臣

吹風をいとひいかさん桜かれちりなハちらの春の山かせ

従三位行能

いつくにもや荻乃人宿はかのへのあれ春のゆふ暮

建保四年百首歌奉りける時

西園寺入道前太政大臣

なかめこし昔ときくもふるとも花のなそあはれなる

道助法親王家五十首歌に庭花

ゆめなれやふまてはへたとひてこそ風吹合よもの白雲

跡しらすす

右大臣

咲ぬれはかつちるものと知なから惜みとめしさ春の山せ

按察使良教

いつはりを春吹風と恨ましちるをなけきしひとの花をこそすれ

前大納言為家

あはれなと残さりしめきえんはまの春さへ惜き山桜哉

洞院摂政家の百首歌に花

前内大臣基

桜まつはあさかなしさをつらしなかにしらぬ花は思ひもあらなん

名所百首歌時

前中納言定家

見よかしもふる里山のかくれは春にゆきさなかそら

建保二年内裏詩歌をあはせられけるに

河上花

吉野川春の日数はあらしまてもはなそちるむせひ瀬来

花歌の中に　前内大臣家

桜花ちりても浪のあはれなるはなにちらぬ花やまさらん

正治百首歌奉りける時　式子内親王

今はとて風をもいとはし吉野川岩こす花の志からみかは

題しらす　左近中将公衡

見るまゝに峯の桜のとこなめて雲に波こす志賀の嵐

郁芳門院安藝

水上に桜ちるらし吉野川岩こす波の花と見えゆく

落花不語空辞樹といふことを

八条院高倉

咲とみしつとに枝にとゝめぬ桜花いとゝや志つ心ありふらん

花歌あまたよませ侍りける中に　去

土御門院御製

春来ぬるしとや風もちそひかんさけはかへちる志賀の花その

庭の花といふ心を　入道前摂政太政大臣

ゆりに春のなひつき春風は志らぬもそのあまりまくとも

千五百番歌合に　後久我太政大臣

雨ふるとていとひし峯の白雲は晴てそ花のかたみえける

題不知　順徳院御製

花鳥の外にも春のありかほに霞てかゝる山の端の月
小式部内侍
見る人も秋はおほつかなけれは春のよの霞をこそ出る月かけ
百首哥奉りし時春月
なかむれは我身ひとつのあらぬ世に昔にゝたる春の夜の月
皇太后宮大夫俊成女
月の春は昔の春と思出てわか身ひとつに誰なるらん
源俊平
暮春の心を
藤原信実朝臣
今は又花のけしきもたのまれし暮るはおしき春の日数

題しらす
鳴とても花やはとまるはかなくも暮行春の鶯の声
躬恒
亭子院哥合に
延喜御製
水底に春やくるらんみよしのゝ吉野の川にかはつ鳴なり
山ふきを
土御門院御製
波こゆる岸の山吹咲しより思ひねのふかき川にかはつ鳴也
家に五十首哥よみ侍ける時川款冬
入道二品親王道助
吉野川いそこす波に山吹は春の日数をとゝめせさるかな
権中納言定家

山吹乃花によせしは山川色乃ちしほに濃そめて
延喜十七年の哥奉りしと仰られしに
貫之
なきゆく河鳴やあかりの山吹の花も今やさくらん
題しらす
後鳥羽院御製
かはつ鳴あかる井手のとこ款冬てちりやしおらん山吹の花
藤原信実朝臣
春くれて井手のしからみきえてゆくせにかゝる山吹の花
建長二年河上款冬といふ題にて詠哥
たてまつらせられ侍し時に

太上天皇
紫の藤江のきしの松かえによせてかへらぬ波そかゝれる
堀川院に百首哥奉る時
基俊
紫のいとよりかくる藤の花この春雨にほころひにけり
藤をよめる
祝部成茂
立帰りまたそてゆかん高砂の尾上の松にかゝる藤なみ
池辺藤といふ心を
鎌倉右大臣
いとはやも暮ぬる春か我宿の池の藤なみうつろひにけり
題しらす
後京極摂政前太政大臣

春とてもゆかりなき藤のはなも家人のゆかり

暮春の心を

くやしくそ花と月とになれにけるやよひの空の名残のは

藤原光俊朝臣

見しくらし春のわかれのちかきには風よりさきの月をみる

前大納言伊平

今はとてのこりけるかな藤なみもとまらすあける春やゆくらん

三月尽心を

土御門院御製

吉野川ゆかぬ春をもしたふかな花のしからみかけてとゝめよ

春乃暮の哥とて

前大僧正慈鎮

わか物といはゝ人のをしむらん春はさらまし我ものにせん

皇太后宮大夫俊成

惜む春はしひてもとめやいはふくらん今日かきりとは

をしみさねらん

續後撰和歌集巻第三

夏哥

百首哥奉りし時首夏

右近大将公相

立かへる春ハ卯月のはしめとや神の社にゆふさゝるらん

藤原行家朝臣

榊葉にかゝる月のみしめ縄まてみ室の山に神まつる也

夏哥の中に

皇太后宮大夫俊成

卯花のさきぬる時ハしろたへの浪もてゆへる玉川の里

亭子院哥合の時哥

よみ人しらす

いつまてかそれともわかん卯花もさきかさなれる垣ねを照す月影

和泉式部

誰か里にまつ宿るらん郭公夜ハ所もさためさるらん

小弁

あやなくもいさよひこしハ時鳥しのふの杜の初音なるらん

藤原清正

時鳥かねて契りしをりならハなかぬ限ハ来さへまたれしま

洞院攝政家の百首哥よ郭公を

前内大臣基

なれぬつらさひとつの声を時鳥待てまたんとやつまなかるらん

百首歌奉りし時郭公といふ心を

権大納言実雄

我そまつとし語りかはさす人待ちかねし初音まちかね

卯月の朔日比内より女房ともあまたして時鳥

聞にとて西園寺に渡りまいりける時に和歌さして

て詠侍ける

前太政大臣

時鳥まつ〇よそのさつき山雲井にまよひあかつ初音そきく

これそと聞てよみ侍ける

弁内侍

雲かゝり鳴きかせは時鳥初音を山のしるしやならん

家に百首歌よみ侍けるに郭公を

後法性寺入道前太政大臣

時鳥ことしはまねの一声は稲荷の杜におとろかまて

宇治にまかりて侍けるに家古き人の許にて

ありけり

宇治前関白太政大臣

里なれて山時鳥くらふる都の人のまちかねやせぬ

返し

祐子内親王家紀伊

都よりいつしかまちし山時鳥かへりてひとしはなと

四月まかり道命法師山寺に侍りけるに

しけり　右深来ゝ

山ふかく鳴かん声をも待るこそはまさりて思ふやまと

高陽院哥合に郭公といふことを

藤原正家朝臣

きゝつともいかてかたらむ待るたひにやよひの一声

夏哥の中に

平政村朝臣

一声はほのかなりしひとみかき郭公

法印覚寛

なのりもふれさひて出よ待るまに山のは出る有明の月

題しらす

大納言通方

卯花の咲ちるをかの郭公月よりしもやまたれてなく

順徳院御製

今こんといひしはかりそ待る夜の月の村雲のそら

郭公鳴也といふつらんとよみ侍けり

大納言経宗

天の戸をあけぬる(?)ほとゝきすいつをまさきて鳴ぬらん

久安百首の歌よみ侍りける時

待賢門院堀河

待れつるふれとりやかた待るほとゝ一声のあかぬつきには

中納言経平家の哥合に

よみ人志らす

夏ふかき山里なれと時鳥ハ志もとをき声さへきこゆなり
みちのくに住は待まちし五月まて時鳥こそ
さりけれハ歌なから人よりかねよりいつけてや
待かしける　藤原実方朝臣
歌よみてふりかん郭公聞のこゑの声そつたなれ

返し　よみ人しらす

郭公なくね聞なりせハ君か住ねきみにこそ志るへせ

題不知　後鳥羽院御製

夏の山田の作なへに雨そそきてとりあへすなく時鳥哉

建保三年五月歌合に夕早苗　参議雅経

里ちかき田中の森の夕日影うつりもあへすとる早苗哉

早苗を　土御門院御製

早苗とる伏見の里に雨すきてむかひの山に雲そかかれる

順徳院御製

峯の松いり日涼しき山かけのすそ野の小田に早苗とる也

右兵衛督基氏

今ハまたさ月もちかし尾上なるかとの田にはなへとる也

百首哥奉りし時おなし心を

前内大臣基

山かけの小田にしめなはなかき日のくれゆくまてとる早苗かな

少将内侍

きのふまてねまちそはふ袖ぬれてやかてそ取る田子の早苗とる人

十首歌合に五月郭公といふことをよませ給けり

太上天皇

里なれく今そ鳴なる時鳥五月と人のまつへかりけれ

権大納言公基

人心まちてまつ近き頃と五月雨に空にさりぬるかくさすか
ありしらす

従三位泰光

なかむとも小鳴やさ月の時鳥まつ忘ひの雲にかくれてそなく

権中納言忠信

かきくらしまたるゝ月もおもふらし時鳥なく里は五月雨の比

従二位家隆

いとせめてなきぬ梅にてし時鳥みなしたふ山の五月雨の比

夏哥中に

前大納言隆房

五月雨はあはれはかなの道てふく数の軒のまゝかな

太宰大弐重家

五月雨の日数まされはあすまてはるかなる関に成にけるかな

前大納言為家

天河きしの浪よりかゝらねはみのこみくる五月雨のころ

正治百首奉りし時

源師光

見渡せはいはせきこえたつせ河ひとつになりぬ五月雨の比

建保四年百首歌の中に

僧正行意

わたのはら一かたにせむ汐せの小波こすさみたれの比

五月雨

覚盛法師

五月雨はいつくも入江のみをつくしみえぬも深きしるしなりけり

皇太后宮大夫俊成

玉藻はいけのかはへにまかりなる五月雨の比

建保二年内裏百番歌合に

参議雅経

ころもめのかはつ鳴なるあさてもみえぬ五月雨の比

順徳院御製

五月雨の雲の晴まをまちえても月みる程のよはそすくなき

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

夏の夜はまたよひなからあけぬるを雲のいつこに月やとるらむ

題しらす

修理大夫顕季

くまもなきみち程なくて明にけりこゝもあかぬ夜半の月

大炊御門右大臣

夏の夜の天の岩戸は明にけり月の光のます程もなく

後京極摂政前太政大臣

鵲の雲のかけはし程やなき夏の夜渡る山の端の月

正三位知家

なにはかたこきはもいそく秋のみなときよりのいさる夏の月

鴨門にて

藤原雅経卿

かりそめに雲る瀬の山の月鳥の声程よりあかぬ程よ明るかた

夜舟中に

惟明親王

夜のまはあかつき程なき枝のとを隔てゝ鶏の鳴きくなる

建保五年四月庚申に夏暁

前中納言定家

なつかしやうつきるもなをさりにしのふの軒にもと咲くのら

百首歌よみ侍けるに

殷富門院大輔

いつまても老にそう見ゆ来ぬ夏とこそやまとの下草

百首歌奉りし時夏草

前太政大臣

露むすふかたもかはらぬ夏草のなかにもしけきよや

題しらす　後鳥羽院御製

夏山のしけミにたてる清ら白露やらん世秋月一よ

堀川院に百首の哥奉りける時　権大納言師頼

草ふかき浅茅まじりの沼水に蛍とびかふ夏の夕暮

建保四年百首の哥に　参議雅経

夜ふかき沢へに飛かりこその思ひみたれて行蛍かな

亭子院の哥合に　よみ人しらす

夏の池によるへ定ぬ萍の水よりかみにゆくそ遠しき

崇徳院御時泉為避暑といふことを人々読侍けるに　梅宗伎云通

苔乃むす岩もる志水の底さよみ下には夜もとぢよ紛り

千五百番哥合に　後京極摂政前太政大臣

山ひめの瀧の白糸くりためてさらす布は夜こそ見えね

正治百首の哥奉りける時　小侍従

夜のまゝや山井の志水涼しとて久しさと志すまで日をくらすき

松下納涼といふことを　源季広

松かけの岩もる清水せきとめてむすはぬさきにかよふ涼しさ

題しらす　西行法師

山里ハそとものま葛葉をしけみうら吹かへす秋をまつかな　まて

夏の篇に　前中納言匡房

夕されは波のしからみ夕河社秋よりさきにしられけれ

百首哥奉りし時六月祓　太宰権帥為経

夜もすから神なひ河のせとやミみそきよする波のしらゆふ

おなし心を　藤原隆信朝臣

みそきするいくせのせそも風ふきて涼しくぬるゝ夕月のそて

後京極摂政前太政大臣

みそき川波の白ゆふ秋かけてはやくすゝしきみな月のそら

皇太后宮大夫俊成

なゝ瀬やみよの河をふみそゝせん岩こす波も秋やちかきと

續後撰和歌集巻第五

秋歌上

秋旅の心を　　後鳥羽院御製

このねぬる朝けの風のをとめこそ袖にまつしる秋やきぬらん

後京極摂政前太政大臣

風のをとにけふよりかはる秋の聲しらぬ身にもむすとやいそく覧

五百番歌合に　　大藏卿有家

淺風に涼しくなひく夜半の蝉鳴らんさに秋はきにけり

寛喜元年女御入内屏風に海邊秋風

正三位家隆

猪名の原秋き色の花やましに涼しくなるゝ松の夕風

立秋の心を　　藤原隆祐朝臣

今朝はまたけは猶しるかは袖のよりてそしるき秋のかはせ

久安百首歌に秋のはしめの心を

大炊御門右大臣

やしなけさ吹風の音はさて秋のこゑもかはりけるかな

清愼公の家屏風に

貫之

いさをふく女かきけと荻の葉風そよく音にそ秋はきぬらん

題しらす

小野小町

なかめつる月日もしらぬまに秋のけしきに成にける哉

山田法師

萩の葉そ風にしられて音すなる穂にこそ稲葉そよくなるらん

九月十三夜十首歌合に初秋露

弁内侍

おく露は草葉のうへと思ひしに袖さへぬれて秋はきにけり

名所歌よませける時

前中納言定家

秋とたに吹あへぬ風に色かはる生田の森の露の下草

建暦二年松尾社歌合に初秋風

おく露のとしもおもふは清よ浪すそふ荻のうはかせ

建保二年五首歌合に初秋

従二位家隆

玉ぬきのあともやとりも白露に風の吹よるかたの袖ぬるゝ
袖しらす

寂蓮法師

今よりは秋のよ風のいかならんけさたに荻の風にみたるゝ

よみ人しらす

秋風の吹てよるすむ白雲は七夕つめのあまつひれかも

山邊赤人

一とせに待して秋まつ七夕のゆきあひのはしにまつとしそ思ふ

山上憶良

久方のあまの河原に舟よせて今夜か君か渡りこさなん

寛和二年内裏哥合に

堀河右大臣

七夕のいつに定めて契けんあふよとしころなかきさと

七夕の心を

従三位頼政

天河あさせふむまし渡る秋をとしみそ渡す鵲のはし

前大納言隆季

さゆるよはあまのかはらの岩枕そふしてあかすとゆそたまけり

土御門院御製

秋を経て天の河原に立波のよるそみしかきさりあへのを

入道前摂政太大臣

あまの川みなけ草に露のまたにあまくさそもあまねみ（よみ）

人麿

天川霧立わたる七夕の雲のころものかへるそてかも

八日あしたによませ給ける

延喜御製

わかる星わかれて後の天川おもむ渡に水まさるらし

秋の日くれによみ侍ける　宜陽門院越前

七夕の涙やそらにへたつらん身にまかれけさは露けさ

七月七日の夜小弁上東門院にまいりて明

おもふに生けるかひつくりけるか

小式部内侍

七夕のたむけにわたる歌をも君ゆへけさそ思ひしりぬる

返し　小弁

天河あふせまれなる七夕によそふかはりの契やはせし

題しらす　源重之

七夕の逢日より秋風の夜ことにさむくなりまさるかな

九月十三夜十五首歌合に山家秋風

少将内侍

かさなれる山の下葉もちりぬらむ人ハやとせて秋風そ吹

文治六年女御入内屏風

後徳大寺左大臣

住吉の松吹風もよりきて夕暮ことの秋風そふく

建保二年内裏秋十五首歌合に秋風

参議雅経

いまよりの萩の下葉もいかならん先こそ今秋風そふく

秋露

従二位家隆

をとめ子か袖ふる山の玉かつらみたれてなひく秋の白露

題しらす　中務卿具平親王

いにしへの旅をとふとそよもすからおきわたしつる袖の露かな

基俊

萩の葉に玉ぬきちらす秋露をはらふる袖てみよかし

順徳院御製

草の葉におきそめしより白露の袖のほかなる夕暮ぞなき

建保四年内裏百番歌合

前中納言定家

なくさめのあはれわさちにとゝく露も草葉にあまる秋の夕暮

題しらず　　西行法師

何となくいふにいふとかきくれたる袂かはらぬ秋の夕暮

雅成親王

うき物と思ひとりてもこりすまに又ながめつる秋の夕暮

藻璧門院少将

なかむるに袂とうしとても身にしらぬ旅の夕暮

源家清　家長卿子

とてもさて何の世にかはいまも猶物思ふに秋の夕暮

入道前摂政家に秋の歌あまた首よみ侍りけるに
読てつかはしける

権大納言実雄

時しらすいつも夕へはあるものを秋しもなとてかなしかるらん

薄を

権僧正能云

花薄ほに出る秋の夕暮はまねくにとゝまる人もなし

寂延法師

みぬ人やさのゝ萩すりかひさ小簾つまふ秋はさかり

二条太皇太后宮大弐

白露はむすひおけとも花薄萩乃枝はおとろひにけり

鳥羽院御時前栽合に

大蔵卿行宗

萩薄まとゐかたせはいかにして秋の風のこゝろとゝめし

影しらす

伊勢

秋の野はなもゝのかそへて女郎花萩かりふのこゝろなるらむ

弁乳母

乃の萩見にゆかりあるにつ

かしけり

陽明門院

露おきしおりてそとふまゝ女郎花むらの萩も皆なのあ

秋のゝさは中に

式子内親王

白露のおとろきはそはぬ萩の下葉そ始なる

鳥羽殿にて八月十五夜の歌合に野草

花

前太政大臣

なくなくも露もわすれはまたよ萩白露に結ふ古枝の秋萩の花

九月十三夜十首歌合に朝草花

太上天皇

忘れにし鶉さてあすかとのりにし袖にかゝりし秋萩の花

土御門院小宰相

露ふかみをやへくよおきなかくらむ庭の妹萩のかれ
乱しらす

権大納言忠信

夜々の下葉色とつきぬ露のまにふかき秋かな

源家長朝臣

見え出すかへしる鳴あり出にて野分つむ下葉の萩は花さへこほれん

久安百首歌に

藤原季清朝臣

清まこふ液なりけりさゝしけみ志つむ萩よかけの白露

百首歌奉りける時

前中納言定家

うつりあへぬ花のちくさに乱つゝ風のうへなる宮木野の露

建保二年秋歌奉りけるに

従二位家隆

さしも露袖かり衣露分て野への萩の色そうつれる

秋の歌中に

前内大臣家

鶉なく夕への秋萩打なひきさそ玉ある露やとる日

藤原隆祐朝臣

露ふかき秋の野原の衣ねまてそ深き萩の花すり

堀河院百首歌奉りし時

基俊

朝露よくたひぬへし花かりにもなみなかに萩の萩
原

鹿哥とて　　　　徳大寺右大臣

鈴かくる露にぬれぬる秋はきをしからみふせて鹿そ鳴なる

藤原清輔朝臣

高砂のおのへの風やさむからんすそのゝ原に鹿そ鳴なる

後朱雀院いまた春宮と申ける時

鹿といふことを読侍けるに

権大納言長家

つまこふる鹿そ鳴なるかくて山里の秋風さむし

五百番哥合に　　後鳥羽院御製

日影さす尾上の松の秋風に夕くれかけて鹿そ鳴なる

建保四年内裏百番哥合に

従二位家隆

足引の山ちの秋に立ぬれて待よ恋しと鹿そ鳴なる

入道前摂政家秋三十首哥の中に

前関白太政大臣

秋風につま恋しとて鹿の鳴山の松のへのさむき夜恋

暁鹿といふことをおのこともつかうまつりけるに

今上天皇

篠のはにかゝるさとひやかへるらんおのか住見さとの聲

百首哥奉りしとき秋鹿

中納言資季

いとりねはなられぬよはの秋かせにおもひくらしてや鹿を鳴らん

藤原信実卿下

秋風につま鶴山のおくとほむさらぬ松のは鹿鳴なめ

山鹿とふ人もなきと

藤原経定朝臣

小倉山ふもとに秋をとしに松風の身にしみしとや鹿の鳴らん

秋夜中に

源資平朝臣

妹まちにゝほひの名かれなと月に恨てしかそ鳴也

藤堅隆将

枯たえん程まてつらき秋草にふしてや鹿のつまをこふらん

建保二年秋十首哥奉りし時

前中納言定家

あつれこし物のふしも秋はあはれとわれも尾上にしかは（こゝろ色き）鳴らん

続後撰和歌集巻第六

秋歌中

是貞親王家の歌合の歌　壬生忠岑

天原やとす人のなけれはや秋くる夜の月をはなくらん

題しらす　中納言家持

秋霧につまよはせる鴈金は雲かくれゆく声聞ゆ也

前内大臣家

天津空雲のよそにて秋風によはそふ海のわたる鴈かね

前太政大臣家にて十五首歌よみ侍りける時

右近大将公相

よしのいらて猿といふとも秋は数よくる鹿の声

題しらす　聖武天皇御製

けさの朝け雁かねさむくきゝしなへのへのあさちそ色つきにける

堀河院御時百首歌奉りける時　権大納言師頼

吉野川きりもみえぬ秋霧にやなせの波のおとのみそする

西園寺入道前太政大臣家三十首歌よみ侍りけるに

けふの秋歌　従二位家隆

朝日さすゆふへのみねも立かくれて立もかはらぬ秋霧

題しらす　後鳥羽院御製

あさ日出る空よりきよき河音の絶まもしらぬ吉野山本

後久我太政大臣

立こめてそこともみえぬ山本に寺の鐘より明るしのゝめ

後京極摂政前太政大臣

よる海の波のまやもみえぬ夕霧に角えく照てあまのいさ（ヲ又）

建保二年秋十首歌めしけるついてに

後鳥羽院御製

我徳やたゝはし山の秋風に雲なき峯をいつる月かけ

百首歌よみ侍りし時山月

前太政大臣

あま川霧さえわたる秋風に山のはいつる月をみるかな

月乃歌の中に　如願法師

心そゆく思ひもしらぬ秋風にはれて空出る月をなかめて

西行法師

天原おなし岩戸を出れとも光ことなるあきのよの月

長兼二年内裏にて月不如秋といふ心を

徳大寺左大臣

よそにある雲井の月もなれは秋は光そてらさりける

月影あまねくてらすみ世の中に

西園寺入道前太政大臣

天河雲のみおゆく月けとせきいれてうつる宿の池水

家乃屏風よ

法成寺入道前摂政太政大臣

雲ちらぬ庭まてはれむ月かけに下てすゝみをそなる

紫式部

くもりなき空の鏡とみるまてに秋のよなかく照る月影

題しらす

京極前関白太政大臣

みかさ山嶺より出る月かけは天津空にも照まさりけり

建保四年百首哥めしけるついてに

後鳥羽院御製

久堅の月のさえこそはし天のはら雲ゐを渡るよはのあき風

正治百首哥たてまつりける時

後京極摂政太政大臣

天津風みかきて渡る空はれて月乃都小玉やしくらん

月乃哥の中に

皇太后宮大夫俊成

月さえて故の秋とみ渡せは千里小志けるおもひなりけり

八月十五夜よみ侍ける

寂蓮法師

名小あて秋乃なかはにこよひそと思ふかなる月のけしき

入道前摂政家八月十五夜哥合小名所月

後鳥羽院下野

はつせ山ゆふつきかたふきとほくまても秋の月かけそあまね

賀茂重保家歌合によみてつかはしける

前大納言経房

昔よりおほくみそちの月なれと秋のもなかやことにひかりん

二条関白右大臣家八月十五夜歌合に

周防内侍

くもりなくさやけきかけはいつよりも雲井の秋のそらにもまさりて見ゆ

花山院前府めされし時

戒秀法師

行末もこよひの月を思ふにはさやけかりけりなにこそ見ん

昌泰元年八月十五夜歌合亭

よみ人しらす

月影の初しほりのそこみゆまさやけきよはむかしなからん

題しらす

後鳥羽院御製

秋の田のほ波のすゑを吹風に月もみたるる露のしら玉

河上月といふことを

権中納言長方

駒とむる日のくま河の底清み月さへかけをうつしつるかな

駒迎といふことを

大蔵卿雅具

あふ坂の関立出るかけみれはこよひそ牧のもち月の駒

建保四年百首歌に
前中納言定家
秋の月河音すゝそおちすむ秋にまち人の誰そとふらん
建仁元年八月十五夜和歌所撰歌合に河
月似氷といふことを　嘉陽門院越前
月影は氷とみえて吉野川岩こす波に秋かせそふく
正治百首歌に　後京極摂政前太政大臣
かしはきやをかけてる夜半に雲消て月のおもに秋風そふく
九月十三夜十首歌合に昔なからの橋の
くちし柱のみかくれる文字まて講せしま

待時の名月　太上天皇
月もなほかけしゝ小橋し橋柱ありとやここにすみ渡るらん
大納言通成
秋の夜は浪の雲もるまみくし月やゆきても秋今もまん
少将内侍
とふ人もやまの里の時雨にわかすむ方の月はいふと
見しらす　前内大臣基
すむ月もいくよになりぬ難波江の古き都の秋風そ吹
十首歌合に海辺月といふことをよませ
給ける　太上天皇

志かの浦の桜は跡もなかりけり月とへそのおもかけもなし

藤原為家卿

ます鏡みなせの滝いかなるにてかゝりけむ秋の夜の月

源俊平

浪のはきれにしほ衣うつやらでよるよるやとまる秋のよの月は中に

蓮上法師

さよのあまの波を衣よりほやや月の影を袖にかゝる哉

平重時朝臣

玉もかる沖つ湊に照月の光をそへてよする白波

藤原基綱

秋そいふにうつろふさまの声や吹上の浜の秋の夜の月

九月十三夜十首歌合に浜辺月

権大納言実雄

紀の国の風吹上の浜の白妙に秋すみのほる夜の月

入道前摂政家の歌合に秋の月を

後堀河院民部卿典侍

いくとせか見し人のたのめ秋といふ月をみる哉

十首歌合に海辺月

右近大将通忠

なにはかたあまねくすゝはいかならでと思ひそそふ旅の夜の月

題しらす

順徳院御製

明石かたあまの苫屋の軒もしてそすめる秋のよの月

藻璧門院少将

とふ人もあらしとおもふみよしのの山はふかくも秋のよの月

九月十三夜十首哥合に名所月

前参議忠定

よそにみし雲もふもとに遠さかりてさや嵐の秋のよの月

参議為氏

秋とてはなかめしらるる月そともまてもしるや松の梓山

藤原為定卿

閑ぬる宵に光やなかえなん梅かえの秋のよの月

田家月

後鳥羽院下野

秋の田の露しく床のいな筵月のやとりもとるやかるらん

祝部成茂

まさらともみしとおもふ山田に庵しめてかす生ふ稲の月かけ

法印耀清

おもしろくそとよめる

秋りみする庵りの袖は秋の田のいねそてにのこる月やみるらん

題しらす

刑部卿範兼

なかさとの世はうつらひと思ひ過天てる秋の月みさりせは

相模

いつくにもふるさとも世をへさうかなへくゆかしき秋の夜の月

藤原仲実朝臣

色まさるつまこの秋をまちえてし秋の夜の月を待て

露深き雲の中には

前大納言隆房

うき身をもおもひしのふにそその秋の月昔よりみなかなりぬる

月宿中に

権中納言定家

昔にも秋なへての秋の月まつはす光のいつかはりけるこそ

西行法師

世のうきに一かたならすうかれゆく心さためよ秋の夜の月

正三位知家

なからへてみしよの秋を忘れても月に昔のけしきやそふらん

入道二品親王道助

いにしへのこゝろにかよふ月のかけも二千里外の秋そしるき

藤原信実朝臣

くもゐとや老の波もこえなん昔よりみる秋のよの月

源家長朝臣

老となるつくさはかはりぬなかりとそおもふまゝに月をみれは

秋の月なかめてすきし世を思へはちゝにかなしき影しらす

土御門院小宰相

昔のよはなかめしものをいつとせん月まつよはむなしかりけり

土御門院御製

秋のよもやゝ深まくり山高みおそくのみ出るこのまの月

建保二年秋十五首歌たてまつりけるに

従二位家隆

思ひ侘ひ秋のしれてとく露よおまりて鳴くと松虫の声

秋の歌中に虫を

前大納言忠良

月にしはしいよゝなく虫そなくなる夜を経ては蓬のなかの道よ

後鳥羽院御製

なく露のはてに大野のましらに恨みかゝる松虫の声

藤原信実朝臣

あさちふの秋の夕のこゑもくもてねよなきおくかたはしもとゝり

土御門院御製

人とはぬあさちかはらの秋風になくなくもまつむしのなく

百首歌奉りし時暁虫

後鳥羽院下野

心してなくらなきこそ暮るゝもゝしき老のねさめに

蓬なかきそのひとゝとふの孫思ふそれてなるねよそなき

題しらす

正三位知家

長夜を枕の下にきゝつくもなく年の暮の老のねさめそなき

法印幸清

忠見

よそなから聲をきゝて萩ねなくも虫のよそとやしらむ

和泉式部

秋の田のいほりにふけるとまをあらみもりくる露のいやはねらるゝ

式子内親王

かりねせし山田の秋のかり枕なれぬ稲の袖の露かな

正治百首歌に　従二位家隆

吹しほる野への草木はいかならん袖にてたえぬ秋のはつしもに

續後撰和歌集巻第七

秋歌下

人〻に百首歌めされし次に擣衣

太上天皇

秋やこと志かの里ゝまつかりに猿さねやに衣うつなり

弁内侍

よそなる稲ねよれなとしせや独やへの衣うつらん

後京極摂政家に十首歌よみ侍しに　前中納言定家

河風によわたる月のさむければやそうち人も衣うつなり

おなし所にめしける次に

後鳥羽院御製

雲ゐとふ雁のは風に月さえてとはたの里に衣うつなり

擣衣の心を

土御門院御製

あさち原そよくゝぬ秋の庭にかさねわたるなみと衣うつらん

順徳院御製

小倉山ふもとの野のさとの夕霧に宿こそみえね衣うつ也

雅成親王

むかしの秋風とさむきまくらにひとりあかす人の衣うつらん

前内大臣家

山高み松のへのさとの秋風にならす秋はむかし衣うつ也

正三位成実

秋とよさの月にみまほしき松風と恨みかねたるにうつ衣哉

入道前摂政家の歌合に風前擣衣

後鳥羽院下野

吹おろす足引の山風やさむからんまのゝうら人衣うつ也

秋夜中に

平重時朝臣

まつ秋の梅かさとにほむさき秋風にたゆむ時なくうつ衣哉

海辺擣衣といふことを

権律師公猷

松嶋やをしまか磯やの夕暮ハ志ほ風さむく成にける也

千五百番哥合に　二条院讃岐

よそにのミ小あミこの志ほやきいとなミに波のうへにも成ぬる哉之
もしらず

良暹法師

よもすゝき折もあゆますゝる衣たえぬ誰かやとハん

伊勢大輔

風のおとにおとろかれてや玉きはるこゝろは荒の庭にきえぬらん

忠義公の家にて人ゝ哥よませ侍けるに

紀時文

秋ふかく旅行野への虫のねハ守人にそ露もらるらし

皇太后宮大夫俊成

虫を

身にかへて秋をまちつきあさちふに恨てもなく虫の声哉

内裏百首哥めしけるついでに

順徳院御製

なくさ乃露のあさちの葉末露乃ふりそやよさむかるらん

秋哥中に

前太政大臣

虫乃ねもしら枯そむるあさちふに影ハよゝる有明の月

よみ人しらず

秋萩の枝もとをゝに露なきてのむきゝ河ともなかりけれ

秋はまたいくかもあらしと荻露霜をきてあはれしるらし

菊をよみ侍ける　源公忠朝臣

うつろはん色をみんとて菊にも露も心をおけるなりけり

閏九月菊といふことを

従二位頼氏

たくひなきかさねる月のあまりの日数よりにほふ菊

正治百首歌奉りける時

土御門内大臣

こりはての松のみとりはかはらねと袖をも山は色付にけり

題しらす

人まろ

秋山の木葉もしらすみちつけきぬ風に露霜おけり

俊恵法師

鶉なくすその野の小萩うら枯て嵐はまたさそ色付にけり

法印良算

長月のしくれのあめは紅葉せてれもあらしも色付にけり

源家長朝臣

初時雨ふりさけみれはあまのはらみかさの山は紅葉しにけり

建保五年四月庚申小秋朝

前中納言定家

小倉山しくるゝ比の朝な〳〵昨日はうすき四方の紅葉葉

秋の歌の中に　入道前摂政太政大臣

雲かゝる梢たちしも山時雨や秋の錦なるらし

建長二年九月山中殊興といふ題にて詩哥を合られ侍しついてに　太上天皇

いにしへの跡を見てやかくし山岸のもみちやふかてかほ

九月十三夜十首哥合に行路紅葉　権大納言実雄

玉ほこの道ゆく人の袖みれはこゝろにそむる紅葉

秋哥の中に　藤原信実朝臣

晴くもり時雨の空すしくれぬもまたちらぬ山の紅葉ゝ

寛喜元年女御入内屏風紅葉　前大納言為家

立田山よその紅葉の色にこそ時雨ぬ松の程もみえけれ

紅葉を　従三位通氏

見る人もなき色時雨はしくれとも山の紅葉をやまはらさと

土御門院小宰相

秋山のちしほの紅葉いろそこれ都の時雨いかて染らん

参議雅経

たちゆく雲のかゝりてそみえまかふや山の錦も色まさるらん

ちりかゝる紅葉のいろはふかけれとわたれはにこる山川の水

大納言成通

法成寺入道前摂政なか月の比宇治にまかれりけるにともなひて紅葉ををりて女房の人々のもとに送りつかはすとて

従一位倫子

みまくおもふ紅葉のちらぬまにこれ里人はならはあるらむ

返し

枇杷皇太后宮

家にさへにほひみちぬる紅葉はふかき山路を思ひこそやれ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

秋山はから紅になりにけりいくしほ時雨ふりて染けん

秋の哥の中に

恵慶法師

紅葉とる山の木のもと忍ひそ秋のふかき（さい）もしられける

寂縁法師

秋とくなりゆくそてをふかさ山嵐は草木はみえてまてきて

参議雅盛

柞原紅葉ちりしく山をみれはやまちも錦しきわたるらん

建保三年内大臣家の百首哥に村紅葉

前中納言定家

山ひめの紅葉はあかぬしらへともれと露も時雨もえらひおきけり（ける）

題しらす　　土御門院御製

散つもる紅葉にみちは埋もれて跡も絶たる峰のふるさと

順徳院御製

竜田川秋せく風のしからみはよはやすもる山の木葉なりけり

大蔵卿有家

嵐ふくともおもせよたつた川紅葉はいつれに立山のあらし嶺り

百首哥奉りし時河紅葉

大宰権帥為経

紅の渕せもわたる竜田川秋のもみちの流るよそて

題しらす

よみ人しらす

足引の山路は紅葉ちりしきてつもれる紅葉ちりしきぬれはな

清慎公家屏風に

貫之

時雨ふる神な月よりちらし山なかれても色付にけり

田家雨といふことをよみ侍ける

法性寺入道前関白太政大臣

かりほさし稲葉のいほりの苫まとも時雨ととに小山田そかる

題しらす

基俊

吹おろす峯の嵐にうちしくれさへあはれそふなる木葉と

建長二年九月詩哥をあはせられ侍し時

山中秋興　前大納言為家

そめもあへすしくるゝまゝに山紅葉をさそふ槙の嵐哉

旅哥中に　藤原伊綱朝臣

秋のゆく山ゐのあはれはふかけりて木葉やさそふ嵐なるらむ

藤原親経　継

あらし吹紅葉の下のしきたへの秋のよるの色そうつろふ

旅の暮哥　藤原清正

風ふけはみさとをさそふ紅葉ゝの色ものこりなく秋の夜の哀れ

和泉式部

我みねの人もしらそらん長月の有明の月よおもひしられ

殷富門院大輔

まといせしとこやゆく旅の空にまた有明の月

前中納言定家

いつふせんさひしきものか木の葉ちりしにたえまも稀な長月の空

祐子内親王家哥合に

紀伊

ふるさとは秋のみやまに風よりも紅葉の色はふかゝりけり

百首哥奉りし時暮秋

前大納言基良

くれはてぬ秋のわかれをしたふとて

権大納言実雄

しくれにそめ立しまゝの葛はからて行秋の別ち
秋の蔦かなとて

右京大夫雅朝臣

神なひのふかしなの木の葉今はと原らに枯ての後の秋風

藤原信実朝臣

紅葉ゝを風にまかするよりも山ねさそりあへと秋はいぬめ

皇太后宮大夫俊成

山路には送りし月もありあけのそらもくもるゝ秋のくれ

堀河院に百首歌奉りける時

祐子内親王家紀伊

なきまゝにおしみし別し人よりも猶さりて行秋の暮
題しらす

素性法師

もみち葉は袖にこきいれてもちて出なむ
物のゆくらん

續後撰和歌集巻第八

冬哥

道助法親王家の五十首哥に初時雨

藤原信實朝臣

冬きぬといふはかりにや神無月けさは時雨のふりまさるらん

冬のはしめの哥とて　藤原光俊朝臣

冬のきて時雨とふれそ神無月ハいつの枯木の葉をふり袖ゆけ

西行法師

あつまやのあまりにもろき時雨哉誰かハしらぬ神無月とハ

大炊御門右大臣

草の葉におきし露のけさハみな霜にむすふ冬のはしめか

土御門院小宰相

紅葉ゝの降しきて我宿に庭もとゝめす冬ハきにけり

正三位知家

神無月しくるゝ跡はいふよしもなく木の葉は嵐に残さりけり

百首哥めされしついてに初冬時雨

太上天皇

冬きては衣手すゝしひまもなく志くるゝ空に嵐吹山

題しらす

前内大臣基

くもゐのあさけの風を吹かへて冬のしくれにちる木葉哉

前内大臣家

吹からに嵐そしるきとなれは山つまなきさへ冬にみえける

後鳥羽院御製

冬かれてそれも梢はいろかはらんいなは田の小庵にしくれふるらし

和泉式部

ときはなる正木のかつら冬来れはあやしくも色のかはるかな

相模

木葉ちる嵐のかせのふく比は涙さへこそおちまさりけれ

寂然法師

夜もすから文枝のいろやまよは覚えて時雨の音にまかふらん

西行法師

しくれかとね覚の床にきこゆるは嵐にたえぬ木葉なり

紅葉浮水といふことを

八条太政大臣

梢をや嵐の渡るらんよみちしらむ山川の水

延喜七年大井川に行幸時

坂上是則

紅葉のちりてなかるゝ大井川せゝのしからみかけもとめなん

名所にまかりける時

前中納言定家

大井川まれの御幸にとしふりて紅葉の色も昔なりけり

家の百首歌よみ侍けるに

洞院摂政左大臣

大井河せきのよとみにまちてちる紅葉のしからみゆきやらぬ覧

落葉の心を　藤原清輔朝臣

山おろしの風なりせハ我宿の庭ハ木葉とあれぬ覧

皇太后宮大夫俊成女

菊合て侍しに親王〈もと〉霜を植へる庭のみち菊

円融院より一本菊たまふとて

尚侍藤原灌子朝臣

しつくれ時にまけける花なれと雲ゐにうつる色ハかはらし

御返し　円融院御製

いまはへをふる涙の時雨にもなほと古ゝ花とこそ逢

後一条院御時中宮大夫家にて侍る

に庚申の秋月照砂菊と云心をよみ

侍ける

権大納言長家

冬なからも枝よりも菊ふかし霜ふりて有明の月を照す白菊

建保六年内裏歌合冬山霜

前中納言定家

冬の日もよそにくれ行山のはに霜ふきまよふ松の下葉

題しらす　大納言通具

野へよりも露のなみたもおもはれなかりける秋の三重霧に

藤原經平卿

あさちふの下葉もいまはかれてよりいくたひ霜の霧わけ

真照法師

まねくらんよそまて霧やたつ山の夕日かくれの荻の下葉

左近中将公衡

霧こもる門田のかりに鳴鴫のはおと計そさひしかりける

惟明親王

風そよくかとたの田のしほれ穂末みえて霧よりのこる明方の空

前内大臣家

拂ふらしいさねよ霜へ(?)のおく鳥たつ山の山もと霧やはるらん

建保六年歌合に冬閑月　順徳院御製

風さゆるよしのの宮りのしもかみしもぬまに有明やみるらん

千五百番歌合に　前大納言忠良

あはち潟渡りてゆくら山のはにいりて月の空消ぬか

百首哥めされし次に有明　太上天皇

天乙女玉もたえそ行雲の上にとよのあかりは雪けにそなる

権大納言実雄

月きよみおもひの雲のへたてなくをとめの袖も光そふらし

冬月　菅原経綱朝臣

楸おふるきよきかはらの霜の上に重てさゆる冬の夜の月

元久二年冬月おもしろかりける夜和哥所のを

のこともともあひくして大井川にまかりて河上冬月

といふことをよみ侍りし　藤原清範

定めなきうきせの河に契ありてや月もすむらん

冬哥の中に　醍醐入道太政大臣

河よとにこほりつゝゆく波のうへにかくれて月をまちけり

文治の比百首の哥よみ侍けるに

前中納言定家

うら風やとはに波こす浜松のねにあらはれてなく千鳥哉

題しらす　長覚法師

おきつ波よせくる磯のむら千鳥心しや浦つたふらん

行念法師

中々に河いへりとまけのねよりて長夜河す鳴千鳥哉

よみ人しらす

難波江にわたりまつ舟の漕かへし河の浜へに千鳥鳴也

和哥所にて釈阿に九十賀給はせ給ひし時の

屏風に　後京極摂政前太政大臣

え河せめ見えしゆふ色はおなじもこずおなじせけ山河のみ

百首歌奉りし時池水　後鳥羽院下野

いく世へてなみの水に根をとめておなじ池のうき草

天暦御時屏風に　中務

おのが池の汀はなとり波よせて波をばかはらざりけり

はるかおもふ心を　権中納言長方

みなと風さむく吹らし鶴の鳴なごの入江につらゝゐぬなり

久安百首歌に霞　左京大夫顕輔

ゆくゝに袖見えらちなる冬枯の秋とならぬ柏葉に霞なる
たなしんを　後京極摂政前太政大臣

天河かともむすぶ岩ねにかけてちるおもかげなり　前中納言定家

霞より志河ゆやよそより行小一秋かりの鳧をぞ
聞しらず　人麿

秋とさむくきえなんとおもひてけさこれは庭もそれは宮ぞかり　井手左大臣

高山の岩ねに生るすがの根のねもころごろにふりおける白雪

権大納言公実

由とかおこたりのたもと紛て雪ふりにけり我そせし

入道前摂政太臣

高山松葉のおさへまなかり雪風白とけぬ日そなき

道助法親王家の五十首哥に松雪

前太政大臣

我宿はけさふる雪にうつもれて松にも風の音絶もせぬ

従二位家隆

菅の原枯はし人はとをせくあらねと山の松は雪そ(唐)

西園寺入道前太政大臣家歌合哥中に

藤原信實朝臣

下折の音のみ松のたえまなく雪の庭あさみ(?)そ

雪哥とて　中納言資季

ちりやふるみかさの杜の松しつえに雪ふき分て嵐ふくらむ

松の枝に雪ふりかゝるをおりて人の許につかはす

とて　紫式部

松山の松葉におつる雪よりも我身世にふる程そはかなき

題しらす　後鳥羽院御製

冬山の雪吹こえのあしたにも月そさやけき(?)

千五百番哥合に　後京極摂政前太政大臣

山里はゆくへの雪のつもりて人影たえし松の下さえ

雪を　　　　寂蓮法師

庭の雪にけふこん人をあはれともふみつけさらん跡そまたるゝ

安嘉門院甲斐

けふ人はとはるゝ雪のつもるまゝ昨日にまさる峯の白山

藤原基雅卿

時しらぬ山とは人もふしのねにみ雪も冬そふりまさりける

嘉暦元年内裏後番の歌合に

前中納言道房

難波かたあしのはしろくふる雪に小屋のあしのやもうつもれにけり

冬歌の中に

徳大寺右大臣

夕暮は志ほ風さむし浪まより見ゆる小嶋に雪はふりつゝ

海邊雪

藤原光俊朝臣

ふりつもる雪吹の空もしほ風に寄りて海の松かゝる嶋

名所百首歌に

藤原清輔朝臣

白山の雪ふきおろしてうらの峯より出る冬の夜の月

としの暮れんを

待賢門院堀川

白雪のつもるはかりを年そへてかさなるは我身もとしにふりぬる

式子内親王

人とはぬ都のほかの雪のうちも春は隣にちかつきぬる

従二位家隆

君かためにつゆよりみちぬ松のはに清まこゝろ山をふるさと

正三位知家

夜鶴の鏡のかけも白雪のつもりは人の身にしみて

道助法親王家五十首哥に惜歳暮

西園寺入道前太政大臣

ちへのひかさねの海にとりむかふとしのくれかな

千五百番哥合に　梅家後慈宗

山あひは松山川のいはしもしらしも身の重となりゆ

たのしみにしてなりゆく百とせの中

に

前大僧正慈鎮

いかにせんひとり昔を恋ひて老の枕に夜はのおもひ

老後年暮によみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

なかくに昔は今日もおしかりき身やくるとしは

いまは物うき

續後撰和歌集巻第九

神祇歌

百首歌たてまつりし時寄社祝　前太政大臣

あきつしまのほかまてに遠神のまもりや我君のため

土御門院御製

光をは玉くし葉にやはらけてみつの国とも定てか

太神宮によせてたてまつる百首歌の中に　皇太后宮大夫俊成

宮はしら下つ岩ねのいはし水万代まてもすまんすゑそはるけき

十首歌合に社頭祝　太上天皇

わかおもふ心のそこにすまむいはし水底にふかめて清き心と

九月十三夜十首歌合に社頭月　前太政大臣

神ち山のちの世をてらすらめくもりぬ宮にやとる月影

入道前摂政家歌合に寄社心を　前大納言為家

いすゝ河神よのみかけとめて今もくもらぬ秋の夜の月

社頭月といふ心を　権大納言公基

ちはやふる神のをしへもおもひしれやみもすそ川の瀬々の月
大神宮にたてまつりける中に
前大僧正慈鎮
忘むそよあまてる神の恵ありて日に契りし末のくもりをもはれは
さしらす
荒木田延季
かみち山峯のあさ日のくもりなく照をもちひや我君かよ
大神宮の一禰宜にて年久しくつかへまつりこ
とゝとひてよめる
志るしあれは宮川の流にたちかへりてそ久しき流代々かけてと
神祇歌の中に
僧正行意
いすゝ川ふりさけみれは神路山さかき葉わけていつる月影
後鳥羽院御製
久方のあまの露しもいくよへぬみもすそ川のちきのかたそき
社頭月
西園寺入道前太政大臣
いつまてもてらさむ世と照まもる人のためにあふく月の社
さしらす
前右近大将頼綱
石清水たのむとならはかはれ久しく世をもまもるときけ
後久我太政大臣
なくとてもせよにかゝす男山あふきて峯より出る月影
いさきよし水の社にくもりてなかれける

後土御門内大臣

神もみよ姿かはりてそれとこそ心ハふかきたのみなりけれ

大納言通方人〳〵すゝめて八幡宮にて
歌合し侍ける時社頭月といふ事を

法眼宗禅

みかとの久しき西より光をもとめてあまてるみよに月そさやけき

賀茂社に詣してこもりまて侍ける時下
社に詣て奉ける

前太政大臣

祈のかひもありける世々のその跡をとふへきハ久しきみかき

後一条院位につかせ給ける時賀茂乃
社に行幸ありける又の日よみて選子内
親王のもとへつかはしける

上東門院

立かへりかもの河波よそにてもみしやみゆきのしるし成らん

皇太后宮大夫俊成述懐歌よみ侍ける
みのおもひの理に是忍に神の皆
おく世とよみて侍ると前中納言定家
もろ人の行末に祈よせられ給しかな
身の行を思ふかくよそにつきかすとて

六条入道前太政大臣

いまいりの松のみどりもかはらずて神のちかひをそみる
權僧正道經人々によませ侍し住吉十首哥
に神祇
素俊法師
春日なるみかさの山の家柄もちかひは住吉をまもれ
住吉の神にゆつるへき求子の事とて
神主經國に歯を侍ける
前中納言定家
住吉の松にかゝるふちなみはよりてかけたる千世をとらなむ
おなし社にまうてゝよみ侍ける
後太政大臣
松にこそなほ千年すらん家のよみならしをなをさんとや
おなし社にまうてゝよみ侍ける
津守國平
わか君を松の千とせによそへつゝみつるはふる代のみやゐ
後三條院すみよしにまうてさせ給ける日よみ
侍ける
大宰權帥經房 千載集
いにしへもきかぬみゆきにあふこそや天くたりけん住吉の神
大宰大貳實政 千載作中弁
あらためぬかへるみゆきはなほも住吉の松にもさらにあひとそみせ
をしらする
前大納言光頼

住吉の松のしつえはかみさひてゆふしてかくる奥つ白波

徳大寺左大臣

行末をかきりはしらす住吉の松はいくよの年かへぬらん

建保二年五首歌合に松経年

後鳥羽院御製

かくしつゝゆきあひの霜をいくかへり契り結ふ住吉の松

後法性寺入道前関白家百首哥に

冝秋門院丹後

万代はかねてしめけん住吉の松は千とせやかきりなるらん

住吉にゆくしてくらん

権大僧都静覚

沖つ波神やうけけん住吉の松のみとりにかゝる世々を

三輪の原しるよしてきこつけ行

前大納言為家

君かめくみ吉の松村古ふりにけりや神よ世々みえん

建長二年三月鳥羽殿に行幸ありし時

そそいそしろは古よむかしと思ふかな

付侍ける

前太政大臣

年をへて又あひみまし契とも結ひやをきし万代の松

東三条院の四十賀屏風に

源道済

神代よりいはひそめてし足引の山ゐのかきにことそかくれ

神祇をよませ給ける

土御門院御製

神ならやそらちへ乃神の心よ神よとかけて秋の月を

百首歌たてまつりし時寄社祝

権大納言実雄

神かきや三室の神ゆふかけて我か八千世をもわか君か為

題しらす

相模

色重ぬ名もかはらぬ君か世とのとかにうたて我か神楽

日吉の社によみてたてまつりける中に大宮

後京極摂政前太政大臣

いにしへの鶴の林にちる花の匂ひをよするしかの浦風

十禅師宮

木本に結ふ世をてらす光そくまなきさかもとの月

同社によみてたてまつりける

前大僧正慈鎮

ひえの山さかゆく月いかめくりこそ我たつ杣のすゑまもるらむ

入道親王尊快

やはらくる光をまちて文殊のおほ空晴かたきわか月

聖恵子家にてよみ侍りける

権少僧都良仙

やはらくる光いてそおもしろし西の雲ゐの秋のよの月

大納言になりてよろこひ申に日吉の社にまいりてよみ侍し

前大納言為家

老らくのおやのみるらむ心にはかゝる鏡を神やうつさん

おりふしのみふねよりて東の方にまかりける時よ本社のことゝもいとゝにまうてゝ涙こほれけるとて

祝部成茂

まそてゝ涙ちりにまじりつゝきそへて袖を色にみえ康家

くてはかりつきまれともあやまちなれと

みくれなくかゝりける神のみあはれ

とてくりのかきけるをそてよめる

契をさして神にみえたることいまつる人社をえらみ侍

小野宮家にて詠し侍ける

前大僧正慈鎮

くもりなき世を照してやあまの人天てらさん

とりあつめをつも慈か侍て同しくなる

けり

お中納言定家

ちはやふる神の世よりはなれてはさかへはりのやまとゝん

元慶二年日本紀竟宴讃彦波瀲武鸕鷀草

葺不合尊　無品本康親王

よろつ海の波かきわけてかよひ道あけられみと君世へん

同六年同竟宴思兼神

三統公忠

ことよるの鳥ならぬ思ひ岩戸より光かくれにあらはれにけり

天児屋根命　橘仲遠

とこやみに照神をうつしてそ月日とゝもに輝はゆる

神事乃まつりのゝ前

足引乃山をゆるしみゆふつけてかけし栄枝を枝にゆふかけ

太玉やそひろの袖に家来ひきいつまて乃榊さ祝詞(んなん)

天の太日吉乃まつりに榊立てゝまつ

乃日に幣をの前とるへむかしより

ひ傳へ尓る

續後撰和歌集巻第十

釋教哥

天平廿一年いこまの山に籠りてをはりとりけるを
侍りける遺戒哥　大僧正行基

かりそめの宿かるわれそいまさらに物なおもひそ仏とをなれ

天台大師の忌日によみて侍りける

前大僧正慈恵

そのかみのいりぬる庭にあまねくて道ある葉の庭をも今や尋ねん

僧正遍昭によみてつかはしける

僧正静観

年をへていくらかゝめても山のかくしの程によりみねにおもひし
難しらす

叡空上人

なにゆゑにやとをあくかれ出ぬらんいつくも月の光とをそ

山のはにかくるゝ月とゝもに禅堂にいるとて
てよみ侍りける

高弁上人

山のはに我もいりなん月もいれよなよなことにまた友とせん

無量義経従一法生

大僧都澄覚

春秋のもみちも白露も色々にひとつの葉よりをきそなりけり

法花経譬喩品日華光如来の心を

皇太后宮大夫俊成

紗来の花の光みつやと雲ふるてそ春にあふちすら

化城喩品　八条院高倉

いそきたてこゝはかりねの草枕しはしやすみの里

五百弟子品　権大僧都源信

ころもきてきふ行やまよひし家のうちなる玉なりせハ

常寂云人教読誦此経典　法橋春賢

月かけやはのとかそとゆくつれしこゝろに合へく峯の松風

乃至以身而作床座

崇徳院御製

いましへ人のおくなりひきそ法のたからみゆらん

唯髻中明珠　京極関白家肥後

もとゆひのなかなる法の玉さにとる限ハあらぬ人そなき

人々に同共八品の寄よまを行けるとき

勧持品　法成寺入道前摂政太政大臣

うへなきにさを求めんまゝ命をも身をもをしむものかは

寿量品

人の世のよのかり雲にかくれても猶すみまさる峯の月

神力品乃心をよみ侍りける

選子内親王

はやくより月の光はてらさすやさはらすや独ゆくほと

嘱累品　　権小僧都延真

おほふなる慈悲の衣はきせられと中にむすふそ玉をかけゝる

如民得王　　参議雅経

うれしさやまよふさまよふ世をすてゝ民のあまねくともし燈を

厳王品　　前大納言公任

頼みし契しおもひは行末もわすれて法のともは後世し

志楽於静處　　寂然法師

ことしけき世をのかれにしみ山へに嵐の風もこゝろしてふけ

止観の月隠重山擧扇喩之

崇徳院御製

雲はらふ国の扇はあふけともくらくの月はたえなりまされ

むかしこそ霊山大士結草為席といふと

藤原光俊朝臣

うらやまし草の莚をならへしの世に生れぬ霊山人

不断光佛　　従二位行能

月も日も影をならへてそめきて絶ぬ光そ身をは照しけり

三界唯一心　　源有仲

野へとのちは千草葉に法へとこそいつまてもおもふ秋の白露

題しらす　入道前摂政太政大臣

ふかき川なきさんなふかいとふへき法のみちいれはあさくなるらん

生死長夜と　従二位行能

ゆきさりしひとのねふりもさめぬへきこゑにむかしのあとのさとしさ

弘法大師の法語を四史にもかゝれけるをよみてつかはしける人に

中原師光

あし原のなにはのみつさえそ法のたえをときふる

後法性寺入道前関白家百首よみ侍けるに般若心経色即是空空即是色

雲かゝるなきこゝろのそらにむかしよりしのきそ色もしらぬそ知る

皇嘉門院別当

佛

阿弥陀四十八願のうちみ仏来の関を見

皇太后宮大夫俊成女

秋風の峯の白雲さそふなり西の空に月をみまほしや

發心のこゝろをよみ侍ける

法宣上人

六の道つくめくりしてあひおもふ十劫の一劫をそみそはむ

観無量寿経説是語時無量寿仏住立空中

蓮生法師

偽のなき世は人のよそれなくと思ひしらするありあけの月

十戒歌よみ侍りけるに不自讃毀他

寂然法師

露上ハ人をそしるハわか身のとりてしつむ物とこそきけ

不偸盗戒　従三位行能

人しれぬわか宿の桜もをらすといひてぬすません

阿弥陀経六方護念心を

信生法師

たく露の深くしめけるよものかみをは何事やなくさみなん

十戒歌よみ侍りけるに

浅ましく命をかけてもゆるさにひとつ行のさとりなかりけり

前大僧正慈鎮

前大僧正慈鎮ハ天王寺に九品往生の傳を

繪にかゝせてそのこゝろを人々によませ侍りけるに上

品中生の歌　入道前摂政左大臣

あまつ露にちらすはれてやとる一葉もそれとも

大日経住心品所衆縁究竟浄菩提心の

こゝろを月によせてよみ侍りける

法印良遍

秋の夜のそら雲も晴にけりゆくへの月のなかむに清せて

佛乃御前にて法ならひて暁かたに月をみて
よみ侍りける　摂政前太政大臣

暁やまぬくの月を雲まよりこの暁そてらしまさりける

題しらず　高弁上人

志つかさや我もやとにはすまよ世をくまなく月の光清る

法印隆弁

給ふらん無世にめくりきて西を月日のゆきてつらん

前大僧正慈鎮

入り出て後のやみちを照さなんことやとふ山の端の月

法務寛信

いりぬとも思ひははなれん月影の鷲のお山にたゝ照世（た）

法文百首歌よみ侍りけるに菩薩清涼月
遊於畢竟空乃心を

素覚法師

ゆきかへりむなしき空にすむ月を心のうちにやとしつる哉

仁王経乃心を　選子内親王

あらなくも教へ置ける神よりもあかりもひろく世に照せ（まされ）

恒順衆生

迷ひさもつきもとにはましめは人に随ふ心なりけり

題しらず

赤染衛門

我となし人もむかしとなひろかはこの世なさりるかなさ

小野宮の堂にはしめて給ける不識法読流の夢にあひて心ざしみえけれはよみ侍りける

康資王母

こよひそ身のうき雲を晴ぬらめ月はむかしの影をとゝめて

上東門院の御はゝまうりて法八講なとゝ申しけるに捧物してまゐるとて

右近大将道綱母

とふふかきなきのりの教にあふくすともいそてあちら家ふへん

天王寺にまうしてよみ侍りける

なにそはま人のねかひをひとつにしおはしかたとりてそ契をきける

前大僧正慈鎮

おなしき寺にて

太政大臣

志ろしの玉井の水とて汲て後ふ契のほと思ひしらし

かの寺にて戒師をしめてかくとてよみ侍りける

今更またたりしに玉となりぬらん難波の寺に今す侍

前大僧正慈鎮天台座主になりて勧学講といふことをはしめおこなひ侍るを聞てつかはしける

後京極摂政前太政大臣

見る〳〵まつ玉の光みちひかは君か此山のはゝくもりし

日吉十禅師 家によみてまつる中に

前大僧正慈鎮

法にあひて世にありときはかりのよにたのみてぞ人にうき

山風に法のともし火きえてみよけふすちりなは

ふさきたちふとも